Osaka University Knowledge Archive

Title	指示性と周知性の関連について : 「あのN」とceNをめぐる対照言語学的考察
Author(s)	井元, 秀剛
Citation	フランス語学研究. 2000, 34, p. 14-26
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/57756
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

Japanese Society of French Linguistics

フランス語学研究，第 34 号，2000 年，pp. 14–26

指示性と周知性の関連について
——「あの N」と ce N をめぐる対照言語学的考察[1)]——
La relation entre le sens démonstratif et l'effet de sens de notoriété

井 元 秀 剛 (IMOTO, Hidetake)

Parmi les emplois des démonstratifs il y en a un qui fait ressentir que le référent est connu de tout le monde, même s'il apparaît pour la première fois. En japonais, cet effet de notoriété n'est trouvé que dans l'emploi du paradigme *-a*. Si on ne regarde que le japonais, on est amené à dire que l'effet de notoriété est lié au trait d'éloignement exprimé par le paradigme *-a*. Cependant, l'essentiel réside plutôt dans le sens du démonstratif. L'observation d'exemples français aussi bien que d'exemples japonais me permet de lancer une hypothèse selon laquelle lorsque le sens démonstratif fonctionne dans l'espace "Mémoire des connaissances générales", espace construit, il crée un effet de notoriété. Ce mécanisme est le même en japonais qu'en français. La différence est qu'en japonais le trait d'éloignement du paradigme *-a* contribue directement à construire l'espace "Mémoire des connaissances générales", tandis qu'en français il faut des introducteurs spéciaux de l'espace et un relatif pour créer cet espace. *Ce N* de notoriété est soumis à plus de contraintes qu'*ano N*.

キーワード: 周知性 (effet de notoriété), 指示語 (démonstratif), 認知的突出性 (saillance), メンタルスペース (espaces mentaux), 記憶スペース (espace "Mémoire des connaissances générales")

0. はじめに

この論文は周知の意味をもつとされる日本語の「あの N」とフランス語の ce N を対照させ，周知の意味効果が生じる一般的な条件をさぐることを目的とする．周知性とは以下の例のように「誰もが知っている」という意味の含意を言う．

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of French Linguistics

(1) Ne vous attendez point à trouver en France *ces* jardins pittoresques qui entourent les villes manufacturières de l'Allemagne, Leipsick, Francfort, Nuremberg, etc. (STANDHAL. *Le Rouge et le Noir*. in Discotext, イタリックは筆者以下同じ)

ライプツィッヒやフランクフルトやニュールンベルクといったドイツの工業都市の周辺にある，あの絵のような庭園が，フランスにもあると思ったら，大違いである．(小林正訳『赤と黒』in「新潮文庫の100冊」下線は筆者以下同じ)

(1) は実際に用いられた STANDHAL の文章と市販されているその日本語訳だが，この例から見てもわかるように，フランス語の ce，日本語の「あの」には周知の意味効果をもたらす性質がある．フランス語の場合，特に ces の形に多く，日本語訳では「例の」をあてることもある．次例も同じ作品の別の箇所のものである．

(2) Pour arriver à la considération publique à Verrières, l'essentiel est de ne pas adopter, tout en bâtissant beaucoup de murs, quelque plan apporté d'Italie par *ces* maçons, qui au printemps traversent les gorges du Jura pour gagner Paris. (ibid.)

ヴェリエールでみんなから尊敬されようと思ったら，石垣をたくさん築くことはむろんだが，それにしても，春になるとジュラの谷を通ってパリに出かけていく例の石工たちが，イタリアからもってくる設計などを絶対に採用しないことが肝心である．(ibid.)

(1) (2) における周知性は多分に修辞的なもので，言及されている jardins pittoresques や maçons が必ずしも実際に著名なものである必要はない．書き手がこれらの対象を「あたかも周知のものであるかのように」扱っているにすぎず，そうした含意を ces が醸し出していると見るべきであろう．(1) の「あの」を「例の」，(2) の「例の」を「あの」におきかえても全く自然な日本語であることからわかるように，「あの」「例の」にも ces 同様周知の意味効果がある．とはいえ，周知性はこれらの単語が本来もっている辞書的意味の一部であるとは考えにくい．この意味効果は ce や「あの」「例の」が特殊な条件下で用いられた場合に限られているからである[2]．このうち ce と「あの」をとりあげ，ce や「あの」に共通するのは，あたかも指で指し示すかのような「指示性」であり，周知性はこの指示性に何らかの条件が加わったときに生じる意味効果である，という仮説から出発する．全く異なった言語体系に属する ce と「あの」から，「指示性」という性質に注目し，それが周知性を帯びることになる条件を比較する．「あの」と同様に指示性を持つと思われる「この」や「その」に周知性が見られないのはなぜか[3]．また「こ，そ，あ」の区別をもたないフランス語の ce が，周知性を帯びる条件は何で，それが「あの」の条件とどう異なるのか．概して周知の ces はそのほとんどが「あの」による翻訳が可

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of French Linguistics

能だが，周知の「あの」はすべて ce で翻訳可能なわけではない．次例は漱石の作品の中にでてきた周知の「あの」だが，翻訳では定冠詞におきかえられており，周知の効果も消されている．

（3） しかし胎児の頸を絡んでいた臍帯は時たまあるごとく一重ではなかった．二重に細い咽喉を巻いている胞をあの細い所を通す時に外し損なったので，小児はぐっと気管を絞められて窒息してしまったのである．（漱石『門』）

Mais le cordon ne faisait pas, comme il arrive le plus souvent, un tour autour du mince cou de l'enfant, mais deux, si bien que, comme elle n'avait pas réussi à dégager ces deux tours au moment où il franchissait *l'*étroit passage, le bébé était mort étouffé par une constriction du larynx. (*La porte* traduit par C. ATLAN p. 137)

ここを ce におきかえることはできず，周知の効果も生じない．それはなぜなのか，このような問題を考察することにより，個別言語の特殊性と，その特殊性にとらわれない指示性と周知性に関する一般的な原理を抽出することができるのではないか，と思われる．語彙レベルの対照言語学的研究は往々にして，両言語間の似通った表現の共通性と差異の指摘にとどまりがちであるが，周辺的な現象であるとはいえ，両言語に共通する「周知性」は，格好の対照言語学的素材であると言えるだろう．

1. 指示性

本稿で扱う「指示性」とは，フランス語で démonstratif もしくは déictique という形容詞で表現され，単語の用法や意味を形容するのに用いられている概念であるが，その定義に関して学者間で合意を見ているわけではない[4]．ここでは特に意味的な概念に限定し，発話者の位置への参照を基に定義されることの多い déictique ではなく，démonstratif を用いて，フランス語の用語としては sens démonstratif をあて，以下のように定義する．

（4） 指示性 (sens démonstratif) とは，それによって言及をうける対象が，その時点で認知的に突出 (saillant) していることを内包することを言い，指示性をもった語を指示語 (démonstratif) と呼ぶ．

この定義をとることでフランス語の ce と日本語の「こ，そ，あ」に共通する意味的属性として「指示性」(sens démonstratif) を認めることができるであろう．直感的に感じられる指示語と「対象を指さす行為」との親和性は「認知的突出性」から生じる．対象を指などで指し示すことは，その対象に対し注意を向けさせる行為以外の何物でもなく，こうして聞き手の注意が向けられ認知的に突出した対象を，その認知的突出性ゆえに指定する語が指示語なのである．指示語の使用と認知的突出

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of French Linguistics

性との関係に関して，突出性は使用の前提ではなく，結果であるとする立場がある[5]．確かに結果として観察される事実は，指示語によって指示された対象の突出性の増加である．しかし，もし突出性が使用の前提にならないのなら，現場指示用法にあって突出性の低い対象を「指さし」という言語外行為による補助を受けなくても指示できなくてはならない．ところが実際には突出性の低い対象は指さしてもらわなければ何を指しているのか理解されない．また，例えば聞き手が図書館などである本を読んでいて，すでにその対象の突出性が高いと判断されるような場合，話し手は指さし行為をともなわなくとも Montrez-moi ce livre. というだけでその本を指示できる．従って認知的突出性はあくまで指示詞による指示の前提である，と考えた方がよい．このことは文脈指示用法においても変わらない．文脈指示の場合「指さし行為」はもとより存在せず，認知的突出性は，直前に言及を受け，談話の焦点になっているというような談話解釈によって満たされることになる．ただ，この「突出性」は状況解釈的，主体的な要素であって，発話の現場で認知可能な対象であれば，あたかもそれが，指示される時点で突出していたかのように再解釈することも可能である．すなわち，指示語の対象はそれが認知的に突出していることによって言及されたものなのだから，その使用によって，逆にその対象が認知的に突出していた，という再解釈を得るのである．こうして，指示語の使用は，あたかも指さし行為が存在し，その対象に注意が集中しているかのような含意を対象に与えることになる．しかし指示語の対象は，少なくとも認知可能で，このような再解釈に値するものでなくてはならない[6]．これを (4) から必然的に導かれる条件として規定しておく．

（5） 指示語で指示される対象は認知可能で，言及の時点で認知的に突出していたという含意を帯びることが可能でなくてはならない．

文脈用法の場合，認知可能性は通常言及によって保証される，と考えられる．従って，言及を受けていないものは，たとえ存在が推定される場合でも指示語の対象とはならない．

（6） J'ai donné la voiture à réparer. {*Le*/**ce*} moteur est en panne.

(6) における ce は (5) によって排除されるのである．

2. 文脈指示用法における「あの N」の性格

日本語の「こ，そ，あ」の指示語の体系の中にあって[7]，文脈指示用法の「あ」は「こ，そ」にはない特殊な性格を示す[8]．まず，文体的な偏りがあり，文学作品の中ではしばしば散見されるが，科学論文のような客観性が重んじられるような文の中ではほとんど見られない．大野 (1977) は科学論文 5 編の中から網羅的に 571 の指示語を収集しているが，この中には「あ」系の用例が 1 つもない．また文学作品の中でも 3 人称形式で語る文より，1 人称の回想形式で語られる文の方にその使

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of French Linguistics

用が多いようである．これは何を意味するのだろうか．

次に，久野(1973)が指摘する「聞き手既知」の原則がある．

（7） a. 話し手：昨日山田さんという人に会いました．その(*あの)人，道に迷っていたので助けてあげました．

b. 聞き手：その(*あの)人，ひげをはやした中年のひとでしょ．

c. 話し手：はい，そうです．

d. 聞き手：その(あの)人なら，私も知っています．私もその(あの)人を助けてあげたことがあります．

（久野，1973：186 原文はカタカナ）

久野によれば，(7)(a)(b)にあっては「話し手」，「聞き手」の双方に，相手もその対象を知っているという認識がないために「あの」が使えないが，(c)の確認により，双方がその対象を知っていると認識することができ，この後「あの」でその対象を指示することができる，という．この周知の意味効果にも通じる「聞き手既知」の原則はどこから生じるのだろうか．

最後に，「あの」にあっては(5)の原則にもかかわらず，先行詞が言語的に提示されていないことも多い．

（8） 家をもってかれこれ取り紛れているうちに，早半月余も経ったが，地方にいる時分あんなに気にしていた家邸の事は，ついまだ叔父に言い出さずにいた．ある時お米が，「貴方あの事を叔父さんに仰って」と聞いた．（漱石『門』）

Une fois entrés en possession de leur nouvelle maison, la moitié d'un mois s'écoula bien vite, mais Sôsuke n'avait pas soufflé mot à son oncle de la question de la propriété, qui lui tenait tant à cœur lorsqu'ils étaient encore en province. Oyoné demanda un jour à son mari:——Tu a déjà parlé de *cette* histoire à ton oncle? (*La porte* traduit par C. ATLAN, p. 39)

(8)の「あの事」は対話の中で現れているが，対象が抽象物であるから，現場指示用法ではありえない．この発話の前後に「あの事」が話題になった形跡はないから，お米は突然ここで「あの事」をもち出したのである．市販されている仏訳から，この文脈ではフランス語でも先行詞ぬきで ce を用いることが可能であることがわかる．「あの」や ce が用いられる(8)と(6)では何が異なっているのだろうか．また，(8)は(5)の原則に抵触しないのだろうか．これらの問題に答える必要がある．

筆者は井元(1993)，IMOTO (1999b)において，日本語の指示詞「こ，そ，あ」の現場指示用法における違いは，現場における主体の位置から対象の位置までの距離区分を基調とすること，さらに文脈用法にあってはその距離区分が対象の存在する

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of French Linguistics

スペースの違いとして認識されるという仮説を提示した．スペースとはメンタルスペース理論で用いられる用語で，言語による述定が成立する最小の文脈的状況を言う．FAUCONNIER (1984) によって導入され，DINSMORE (1991)，CUTRER (1994) によって精緻化された．現在は BASE, V-POINT, FOCUS, EVENT の 4 つの基本スペースが想定されている．「あ」の指示対象は「(話し手の)記憶スペース」という，発話行為から離れた記憶の中に要素を求めるものと思われる．このスペースは談話の展開にともなって必然的に設定される基本スペースではなく，記述される内容に基づいたスペースの一つとして提案するものである．メンタルスペース理論では初期のころから，「話し手の現実」，「太郎の意識スペース」，「ドラマスペース」というような言い方でスペースが指示されることがあった．「(話し手の)記憶スペース」もこうしたスペースの一種であるが，条件文の条件節によって導入される「基盤スペース」(foundation) や，帰結節によって導入される「拡張スペース」(expansion) などとともに，その性質を規定し一般化することが理論全体の発展の上でも望ましいだろう．東郷 (forthcoming) は，独自の談話管理モデルを提示し，コ・ソ・アの用法を説明づける試みだが，そこで提案されている「共有知識領域」の概念は本稿における「記憶スペース」の概念とほぼ完全に重なるように思う．東郷は「共有知識領域は，世界についての一般的知識を格納する「百科辞典的知識」と，個人的体験についての知識を格納する「エピソード記憶」からなる」と述べているが，この二つの知識は「記憶スペース」の要素を構築する二つのソースであり，結論を先取りして言えば周知性は「百科辞典的知識」をソースとする「記憶スペース」の要素が指示されたときに生ずる意味効果なのである．

さて，あらかじめさまざまな属性とともに登録されている記憶スペースの中の要素を想起している時，その対象は認知的に突出している．つまり，少なくとも話者にとって (5) は「記憶スペース」というスペース属性により，本来的に満たされているのである．「あ」が先行詞を必要としない理由もここにある．「あ」が指定するのはあくまで記憶スペースにあらかじめ存在していた対象であり，あらかじめ知り得ていた属性に基づいてその対象を指定する．春木 (1991) でも指摘するように，一見先行詞のように見える要素が談話内に導入されていても，「あ」が直接指示するのはその要素ではない．メンタルスペースの用語を用いるなら，その要素とコネクターによって結ばれている記憶スペースにあらかじめ存在していた要素を「あ」が指示すると考えた方がよいだろう[9]．科学論文において「あ」が少ないもしくは見られない理由は，このような暗黙の了解に基づく「記憶の中の対象」を指示させるような表現が，客観性を重んじる論文の文体にそぐわないことにあると考えられる．

「あ」が典型的に現れるのは独り言の場合である．話し手の意識が現前の対象にではなく，記憶の中の存在物にある場合，その記憶の中でより突出した対象が「あ

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of French Linguistics

の」によって指示されるのである.

(9) 己が夕方にでもなって湯にでも行って，気の利いた支度をして，かかあに好い加減な事を言って，だまくらかして出掛けるのだなあ，そしてあの格子戸を開けて，ずっと這入って行ったらどんな塩梅だろう.（鴎外『雁』）

C'est bon. Le soir, après le bain, je m'habillerai avec soin, je donnerai à la mémère un prétexte quelconque pour l'endormir, et je sortirai. Et puis, en ouvrant *cette* porte treillissée, si j'entre tout droit, qu'est-ce que ça donnera? (*L'Oie sauvage*. traduit par R. VERGNERIE, p. 27)

おそらくこの科白を発している時の話し手の想像の世界の中では，ここで指示される格子戸があたかも目の前にあるかのようにはっきりと映っていたのだろうと思われる．この場合(5)の条件は完全に満たしており，認知可能性を得るために時前の言及をあえて必要としない．このように日本語では「あ」が「記憶スペースの存在物」という属性をもつから，他の文脈的条件が加わらなくとも先行詞不在の指示語「あ」を用いることができる．これに対し，フランス語の場合，ce は用いられた文が独り言の回想であり，その対象が認知的に目立ちうるということが文脈的に示されなければ難しい．日本語の自由間接話法内で用いられた「あ」は仏訳ではほとんどが le におきかえられ，指示語がもつ認知的突出性のニュアンスは訳文では犠牲にされている.

(10) その時けさ途で逢った，あの女の所に，今時分夫が行っているだろうと云うことが，今更のようにはっきりと想像せられた.（鴎外『雁』）

A ce moment-là, son imagination lui montra avec plus d'intensité son mari qui, au même instant, devait se trouver chez *la femme* qu'elle avait rencontrée le matin. (ÔGAI, *L'Oie sauvage*, p. 76)

(10)の場合でも，訳者が採用した他者から見た客観的描写のスタイルが，回想スペースの中の主観的な対象の突出を避けさせたのではないかと思われる.

独り言 (monologue) の場合，回想スペースを自分が理解できる限り自由に開き，その中で存在前提をもつような「あ」による定記述を自由に用いられ得る．しかし，その要素は個人的な体験に基づく「エピソード記憶」をソースとするものがほとんどで，他者と知識を共有するという周知の意味効果は生じない.

次に二人称の聞き手が想定される対話 (dialogue) の場合を考える．対話は次の語用論的なストラテジーに則って展開されるものと思われる.

(11) 話し手は聞き手と情報を最大限に共有するように対話を進めなくてはならない.

これは聞き手が知らない情報は新情報として提出し，旧情報として提示される場合にも，聞き手が知っている以上の情報をできるだけその情報の前提に組み込んでは

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of French Linguistics

ならない，ということである．「あの」は指示語であり，認知的突出性を条件として対象を特定するのだから，聞き手も「あ」が指定する記憶スペースを共有し，その対象を突出したものと捉えていることが前提とされうるような状況で用いられるのが望ましい．これが(8)である．この二人の対話者の間では「あの事」と言っただけでどの事かわかり得るような，その対象が認知的に突出した状況ができあがっているのである．この状況はフランス語の場合も全く同じであるから訳文でも先行詞抜きの cette histoire が用いられている．

久野の指摘する「聞き手既知」の原則は，(11)を守ろうとすることによって生じる原則であると理解することができる．「あ」の対象を聞き手が知らない場合，聞き手は話し手と「記憶スペース」を共有することはできず，従ってその対象も認知できない．(7)において，(a)の「その人」と(d)の「あの人」の指示対象はそれぞれ異なったスペース内の要素であることに注意してほしい．(a)の「その人」は「山田さんという人」が導入された談話スペース内の要素であるのに対し，(d)の「あの人」は(c)によってその要素とコネクターで結ばれた記憶スペース内の要素を指している．この聞き手が問題の山田さんを助けてあげたのはこの記憶スペースの中のできごとであり，話し手が山田さんを助けてあげたスペースでのできごとではない．

ここで，黒田(1979)，金水・田窪(1990)があげる久野の例に対する反例を検討しておきたい．

(12) 今日神田で火事があったよ．あの火事のことだから人が何人も死んだと思うよ．
(黒田，1979: 55)

(13) a. ぼくは大阪にいるとき山田という先生に習ったんだが，君もあの先生につくといいよ．
b. ぼくは大阪にいるとき山田という先生に習ったんだが，君も{?*あの/その}先生につきなさい．
c. ぼくは大阪にいるとき山田という先生に習ったんだが，君も{?*あの/その}先生につく気はありませんか．
(金水・田窪，1990: 94–97)

(12)(13a)では，話し手は聞き手がその対象のことを知っているという前提で話しているわけではない．これらの文は次のような構造をもっていると思われる．

(14) [$_{E1}$ 今日神田で火事があったよ．]
[$_{E1}$ [$_{E2}$ あの火事のことだから人が何人も死んだと思う] よ．]

(15) [$_{E1}$ ぼくは大阪にいるとき山田という先生に習ったんだが，[$_{E2}$ 君もあの先生につくといい] よ．]

すなわち，対話として成立している E_1 というレベルの中に，独り言のレベル E_2 を

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of French Linguistics

埋め込んでその全体を聞き手に提示しているのである．ここでも E_1 における「火事」,「山田という先生」と E_2 における「あの火事」,「あの先生」では備えている属性が異なっている．前者は E_1 の発話で初めて導入された要素にすぎず,「今日神田であった(火事)」,「話し手が大阪にいるとき習った(先生)」という属性しか備えていないのに対し，後者は記憶の中にある「何人も死んだと思われるような激しさをもった(火事)」,「指導をもとめるにふさわしい(先生)」という属性を備えていることが想像される．E_1 のレベルでこれらの記憶スペースの要素が，そこで導入された「火事」や「先生」と結びつき，このレベルでは (11) の違反を回避しているのではないかと思われる．(13b, c) が難しいのは，疑問文や命令文では直接相手に対する働きがあり，この中に独り言のレベル E_2 を想定することが難しいからだろう．

このように考えてくるなら,「あの」は記憶スペースにおいて存在があらかじめ確立されているものを指すので，純然たる意味における先行詞は存在しないと言ってよい．そして，先行詞が存在しない場合 (14) (15) のような解釈の余地はなくなるので，(5) の原則から聞き手も同じ記憶スペースを話し手と共有し，その対象を認知できなくてはならないことになる．これは聞き手もその対象をあらかじめ知っているということにほかならない．こうして久野の指摘した「聞き手既知の原則」が説明されるだろう．ただし，対話の場合「記憶スペース」の要素は個人的体験を共有する特定の聞き手との「エピソード記憶」をソースとするのが普通で，周知の意味は帯びない．

最後に特定の対話者ではなく，不特定一般の読者を聞き手とする語り (récit) の場合の考察に移る．この時「記憶スペース」の要素は,「聞き手既知の原則」から，話し手の個人的体験に基づく「エピソード記憶」ではなく，一般の読者が共通にもつ「百科辞典的知識」にソースをもつことになる．そのようなスペースの中にあって認知的に突出しているがゆえに指示されている対象は，誰もが知っていて，まざまざと想起できる対象であるということにほかならない．これが周知の意味効果である．指示語のもつ認知的突出性の含意が,「百科辞典的知識」をソースとする「記憶スペース」の要素に発現したとき，この効果が生ずる．日本語の場合,「あ」が指示性と記憶スペースの存在物指示という二つの性質をあらかじめもつため，その対象が個人的体験によるエピソード記憶の要素でないことが文脈的に示されればこの効果が生じる．通常語り (récit) の中で「あ」が用いられればこの条件が満たされることが多く，本稿であげた (1)-(3) はいずれも語りの文の中で用いられている．ただし，独り言や対話の場合でも「記憶スペース」のソースが「百科辞典的知識」であればこの効果が生じる．

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of French Linguistics

3. 周知の意味効果をめぐる「あのN」と ce N の比較

フランス語の ce は日本語の「あの」と異なり，指示性のみで「記憶スペースの要素という属性を備えていない．そのため，周知の効果が生まれるための文脈的条件は日本語の場合よりもかなり厳しくなる．談話によって新たに構築されるスペースとは別に，「百科辞典的知識」に基づく記憶スペースを文意によって構築することができなければ，(5) によって，指示語の使用そのものが排除されてしまうからである．フランス語の周知の ce がほとんど日本語の「あの」で訳出できるのに対し，その逆が成り立たないのは記憶スペースが文意だけでは構築できないからである．

フランス語の ce がどのような条件のもとで周知性を帯びるかについて，春木 (1990) が詳しく述べているが，それによると周知性を持つ ce N は以下のような性質をもっていることが多い．

(A) 関係節を従えている．

典型例，(1) (2) における ces jardins pittoresques や ces maçons がどちらも qui 節を従えていることに注目されたい．

(B) ce N の N は複数形が普通である．

(1) (2) の例も複数形であり，筆者自身は単数形の用例を見いださなかった．春木 (1990) には (16) のような不可算名詞の例の他，(17) のような例があがっているが，これはかなり特殊なケースであろうと思われる．

(16) François admirait le comte (...). En retour, Orgel éprouvait sans le savoir, un peu de *cette reconnaissance* que l'on éprouve envers qui nous porte envie.
(RADIGUET in HARUKI 1990, イタリックも春木)

(17) Au forum des Halles il y a des hommes qui partent acheter de la mousse à raser et qui reviennent avec des jouets, qu'ils donneront aux enfants qu'ils feront avec *cette femme* qu'ils n'ont pas encore rencontrée.
(publicité dans les stations du métro '89 in 春木 1990, イタリックも春木)

(C) 従節の時制は一般に現在形か半過去形である．

筆者の観察ではなかでも現在形が多い．半過去の典型的な例はやはり春木 (1990) があげる

(18) Dans sa candeur, il lui rappelait *ces* fillettes qui, autrefois, le Jour de la Fête-Dieu, marchaient en procession vers l'autel une fleur à la main.
(JEANNE, in 春木, 1990, イタリックも春木)

(D) ce N+Rel. を導入する表現に意味的類似性が見られる．一つは rappeler, se souvenir de, faire penser à など，記憶を喚起させる表現であり，もう一つは類似性

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of French Linguistics

を喚起させる donner l'air de, ressembler à, comme などである．例としては上の(18)がそうであるが，筆者が収集したものの中ではそうでないものもかなり多い．

(E) 周知の形容詞を伴った名詞句は発話の頭にはあらわれない．

(19) *Ces hommes qui vivent longtemps seuls prennent souvent l'habitude de parler seuls.
(春木，1990)

(19)は「あの長い間一人で暮らしてきた男達」という周知の意味を ces hommes では表現することができない．

日本語にはないこれらの条件は，いずれも百科辞典的知識に基づく記憶スペース構築のための条件と解釈することができる．まず，記憶スペースは談話における発話行為と独立にあらかじめ成立しているものでなくてはならないから，談話スペースを構築する主節とは別に関係節によって導入される．この条件が(A)である．また(19)のように，関係節を以下の談話のスペース構成の基準となる文頭の位置におくと，独立した談話スペースを主節が構築しにくいから，(A)と同様の動機によって(E)の条件も説明される．(B)(C)(D)は指示対象が特定の具体物である解釈を退け，総称スペースとして記憶スペースを実現させるための条件であると理解される．単数名詞は関係節による限定をうけると特定解釈をうけやすい．その意味で(17)は否定関係節によって特定解釈をまねがれているまれな例である．関係節は総称スペースを開くためのものであり，その中の記述は総称文である以上時間軸上の特定の位置に位置づけられるような事態を表現してはならない．ここから(C)が出てくる．さらに(D)はこうして作られるスペースが記憶スペースであり，談話スペースから遊離したものであることを示す助けとして働いているものと解釈できる．もちろん(D)は絶対的な条件ではない．ただ，百科辞典的知識に基づく記憶スペースがなぜ，個別の具体的事例であってはならないのか，について確かなところはわからない．おそらく特定の個体と時間軸上に固定された事象はエピソード記憶と関連づけられやすいせいだと思われる．上記(A)-(E)の条件に関しては例外も多いので，この点とあわせて今後さらなる検討をかさねていきたい．

4. 結　論

以上のような観察と考察から以下のような結論を導けるように思う．周知の意味効果は日本語においてもフランス語においても，指示語の持つ認知的突出性という意味内容が，百科辞典的知識をソースとする記憶スペース内の要素に適応された時に発現される意味効果である．日本語の場合，「あ」が文脈指示用法において「記憶スペース内の存在を指示する」という性質を語彙的にもつことから，指示語「あの N」を聞き手として特定の対話者を想定しない文脈におくだけでこの効果が生じ得る．これに対し，フランス語の ce N には指示性しかないために，総称の関係

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of French Linguistics

節を用いて談話スペース以外の所に記憶スペースが設定されるような文脈でなければこの効果は生じない.

(大阪大学)

[注]

1) 本研究は IMOTO (1999) の一部を基に, その後の調査・考察を加えて行った第183回例会の口頭発表をさらに発展させたものである. 例会の際に貴重なコメントをいただいた方々に感謝したい. また, 本研究は文部省の科学研究費の助成を受けて行われた(奨励研究A課題番号10710239).

2) 後にあげる例(8)は ce, 「アノ」「例の」のいずれもが可能であると思われるが, ここでは「あなた(聞き手)も知っている」という含意にとどまり「誰もが知っている」という含意はないから周知性を持っているとは考えにくい.

3) 本稿では問題にしないが, 「そ」に関しては指示性を認めないという立場も存在する.

4) 詳しくは KLEIBER (1992), ZRIBI-HERTZ (1992), 井元(1993a)参照.

5) de MULDER (1990) が, この趣旨のことを主張している. ただし, de MULDER は saillance ではなく, focus という用語を用いている.

6) 現場において知覚可能であることの延長として, 対象の認知可能性を考える. すなわち, 「対象が認知可能である」とは, 現場用法においては実際の対象が目に見える, ということであり, 文脈指示(含概念指示)用法にあっては談話によって構築される心的イメージの中に存在すること, を意味する. 文脈指示の場合, 原則として言及をうけて談話内に導入されていなくてはならず, 状況によって存在が推定されるものは認知可能とは見なされない. 井元(1989)参照.

7) 以下において「こ」「そ」「あ」はそれぞれ, 「この」「これ」「こんな」等これらの形態素を含む一連の指示表現全体を表すものとして用いる.

8) ここでは「文脈指示」を広義にとって, 「現場指示」以外のすべての用法を「文脈指示」と記すが, 後にのべるように「あ」の指示対象は文脈によって談話内に導入された要素ではない. このため春木(1991)は「概念指示」というカテゴリーをたてて文脈指示と区別しているが, このカテゴリーを認めるならば「あ」には概念指示用法しかなく, 文脈指示と形容することには問題があるかも知れない.

9) メンタルスペース理論では, 異なったスペース間の要素の間に生じる関係をすべてコネクターと呼んでいる.

[参考文献]

CUTRER, M, (1994): *Time and Tense in Narratives and Everyday Language*, Ph. D. diss., University of California, San Diego, UMI diss. Services.

de MULDER (1990): "Anaphore définie versus anaphore démonstrative: un problème sémantique?", in KLEIBER et TYVAERT eds. *Anaphore et ses domaines*, Klincksieck.

DINSMORE, J. (1991): *Partitioned Representations*, Dordrecht, Kluwer Academic Press.

FAUCONNIER, G. (1984): *Espaces mentaux*. Paris, Les Editions de Minuit.

春木仁孝(1990): 「現代フランス語の「周知の指示形容詞」について」『言語文化研究』第16号

春木仁孝(1991): 「指示対照の性格からみた日本語の指示詞——アノを中心に——」『言語文化研究』第17号

井元秀剛(1989): 「le N と ce N による忠実照応」『フランス語学研究』第23号

井元秀剛(1993a): 「anaphore 概念に関する一考察」『フランス語学研究』第27号

井元秀剛(1993b): 「日本語とフランス語の deixis (指示詞)」『仏語仏文学研究』.

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of French Linguistics

第9号. 東京大学仏語仏文学研究会
IMOTO (1999): *Le problème linguistique de la référence des syntagmes nominaux en français et en japonais*, thèse à l'Université Paris 8.
金水敏・田窪行則 (1990): 「談話管理理論からみた日本語の指示詞」『認知科学の発展』3. 日本認知科学会
KLEIBER, G. (1992): "Anaphore-Deixis: deux approches concurrentes", in MOREL, M-A. et DANON-BOILEAU, L. eds. *La deixis: colloque en Sorbonne 8-9 juin 1990*, PUF.
久野 暲 (1973): 「コ, ソ, ア」『日本文法研究』. 大修館書店
黒田成幸 (1979): 「(コ)・ソ・アについて」『林栄一教授還暦記念論文集・英語と日本語と』. 大修館書店
大野美江子 (1977): 「文章に使われた指示語——コ系・ソ系の機能差——」『東京女子大学日本文学』第48号.
東郷雄二 (forthcoming): 「談話モデルと日本語の指示詞コ・ソ・ア」『総合人間学部紀要』. 第7号, 京都大学
ZRIBI-HERTZ, A. (1992): "De la deixis à l'anaphore: Quelques jalons", in MOREL, M-A. et DANON-BOILEAU, L. eds. *La deixis: colloque en Sorbonne 8-9 juin 1990*, PUF.
(例文)
Discotext: Textes littéraires français 1827-1923 (1992), CD-ROM, Hachette.
新潮文庫の100冊 (1995), CD-ROM, 新潮出版.
近代作家用語研究会編 (1984): 『作家用語索引 森鴎外』, 教育社.
OGAI, traduit par R. VERGNERIE (1987): *L'oie sauvage*, pof.
近代作家用語研究会編 (1984): 『作家用語索引 夏目漱石』, 教育社.
SOSEKI, traduit par C. ATLAN (1992): *La porte*, Editions Philippe Picquier.

NII-Electronic Library Service